中国と北朝鮮の国境地帯における人びとの移動と生活実践に関する人類学的研究

―1930年代から1950年代を中心に―

朴　　歓*
李　　仁　子**
直　井　啓　太***

本稿の目的は，中国と北朝鮮の国境（以下，中朝国境）地帯における人びとの移動，並びにそれに伴うモノの移動を明らかにすることである。中朝国境を越えて移動する人びとの数（量）や動機，目的（質）には，1910年日本帝国主義による強制併合時から現代にいたるまで，時代ごとに異なる様相が見られ，時を経るごとに大きな変遷を遂げてきた。それはすなわち，「人びとの移動の障壁」という意味での中朝国境の「存在感」が時代によって変化してきたということでもある。国境が，そこを行き交う人びとの眼前に壁のように高く立ちはだかる時代もあれば，あたかもそれが地中に溶融し消失してしまったかのように人びとがスムーズに行き来する時代もあった。

キーワード：中朝国境，国境地帯，朝鮮族，移動

1.　研究の背景

本稿の目的は，中朝国境地帯における人びとの移動，並びにそれに伴うモノの移動を明らかにすることである。中朝国境を越えて移動する人びとの人数や方法，動機，目的には，1910年日本帝国主義による強制併合時から現代にいたるまで，時代ごとに異なる様相が見られ，時を経るごとに大きな変遷を遂げてきた（いる）。それはすなわち，「人びとの移動の障害」という意味での中朝国境の意味合いが時代によって変化してきたということでもある。国境が，そこを行き交う人びとの眼前に壁のように高く立ちはだかる時代もあれば，国境など存在しないかのように人びとが往還する時代もあった。

もっとも，グローバル化が進む90年代以降に限って見てみれば，それまでの単方向的な移動とは異なった多方向的な移動が顕著に見られるようになる。それらの契機となった出来事には，アジア経済危機（1997年）以降における韓国企業の中国進出に際し，雇用機会を求めた朝鮮族の移動や，日本の方針転換[i]による朝鮮族IT技術者の来日の動向などが挙げられる。

本稿では，現在進行形で起きている多方向的な現代的移動形態が始まる1990年代以前の近代，と

*教育学研究科　博士課程後期
**教育学研究科　准教授
***教育学研究科　博士課程前期

りわけ，1930年代から50年代頃を中心に論じる。これはすなわち，1932年の日本帝国による満洲国建国からその消滅（1945年）を経て，1950年に勃発し53年に終結を迎える朝鮮戦争前後までの時代である。

この間の概略を述べる。朝鮮半島を植民地としていた大日本帝国は，中国東北部三省（遼寧省・吉林省・黒竜江省）地域に当たる「満洲」建国を，中国とソ連，さらにはアメリカからの国防の拠点と位置付けていた。中国とソ連に対しては，満洲が国境を接することから，それが日本内地を護るための最前線となり得た。また，満鉄買収計画[ii]以来，満洲諸鉄道の中立化案提起[iii]や対中国国債借款団の結成のリードをするなど，満蒙を含む中国市場への進出に深い関心を払ってきていたアメリカに対しては，来たるべき日米開戦に備えて，中国さらには東アジアを「兵站基地化」するための大前提として満蒙領有計画[iv]が持ち上がっていた。このような経緯で建国された満洲国は1945年日本敗戦と共に幕を閉じた。

他方，朝鮮戦争は，いうまでもなく南北に分断された朝鮮半島で1950年6月に勃発した戦争である。北朝鮮軍の南下から始まり，アメリカが南を支援して盛り返し，後半は中国軍が北を支援して参戦，53年に北緯38度線を境界に休戦協定が成立した。冷戦下のアジアにおける実際の戦争となり，日本にも大きな影響を与えた。

2.　先行研究と本研究の視座

代表的な先行論に権（クォン）（2011）の「朝鮮族の移動と東北アジアの地域的ダイナミズム　―エスニック・アイデンティティの逆説―」がある。ここでは，「マクロな視点から『事実的な移動』を考察しつつ地域的ダイナミズムと関連づける方法と，一個人に内在するミクロな視点から『身体的な移動』を帰納的に捉える方法とを組み合わせることで，朝鮮族の移動を総体的に把握する」ことが試みられている。前者を大文字の歴史，後者を小文字の歴史と見れば，権の先行論と本稿の相違点は，小文字の歴史にある。鶴園（2006）の「朝鮮民族の人的移動に関する歴史的考察」に代表される大文字の歴史は，静的かつ固定的で研究の余地がそれほど残されていないと考えられるのに対し，小文字の歴史は動的かつ流動的であり，調査対象者によって一人ひとりの物語が語られることが多く，多様性に富んでいる。さらに後者の必要性に関して，権も「身体的な移動については，さらに多くの事例，とりわけ世代ごとの事例を集めた比較・実証研究が求められる」と述べている。

権の述べるミクロな視点から捉えた「身体的な移動」，換言すれば小文字の歴史は，主にある一人物の調査対象者（インフォーマント）に関するエスニック・アイデンティティに着眼するのに対し，本研究では，22名の朝鮮族への聞き取りから得られた小文字の歴史を，大文字の歴史と照らし合わせつつ，調査対象者の個別具体的なエピソードをも交えながら，総体としての朝鮮族移動の歴史の再構成を試みるところに，相違点や独自性があると考える。

3.　調査概略

3.1.　調査対象・調査方法

本研究では，主に中国吉林省東部の東北辺境の延辺朝鮮族自治州をフィールドにして，国境地帯に住む人びとの生活実践や，国境地帯で行われている民間レベルでの交流を観察し，調査を行うことにした。調査は主に60代・70代・80代の朝鮮族の人びとを対象とした半構造化インタビューである。

3.2.　調査地・調査時期

今回の調査は2018年8月の8日から22日まで，前半と後半に分けて行われた。前半は8月8日から13日まで，後半は8月14日から22日までとした。前半の調査は韓国で行い，インフォーマントの家で住み込み調査を行うことにした。後半の調査は中国で行われ，主にインフォーマントの家を訪問して半構造化インタビューを行った。また，前半の調査では共同執筆者の直井が朴と同行し共同調査を行い，後半の調査では共同執筆者の李が朴と同行し共同調査を行った。

表1　2018年8月8日～22日までの調査状況

	日付	調査地	インフォーマント
前半	8月8日～13日	韓国，清州市	インフォーマント1・インフォーマント2
後半	8月14日	延辺朝鮮族自治州，龍井市	インフォーマント3
			インフォーマント4・インフォーマント5
			インフォーマント6
	8月15日	延辺朝鮮族自治州，龍井市，开山屯鎮	インフォーマント7・インフォーマント8
			インフォーマント9
			インフォーマント10
			インフォーマント11
		延辺朝鮮族自治州，延吉市	インフォーマント12
	8月16日	延辺朝鮮族自治州，龍井市	インフォーマント13
		延辺朝鮮族自治州，延吉市	インフォーマント14
	8月17日	延辺朝鮮族自治州，延吉市	インフォーマント15
	8月18日	延辺朝鮮族自治州，琿春市	インフォーマント16・インフォーマント17・インフォーマント18
			インフォーマント19・インフォーマント20
	8月22日	延辺朝鮮族自治州，延吉市	インフォーマント21
			インフォーマント22

4. 移動の歴史

崔慶植（2004）は朝鮮人の移住の歴史を6段階に分けて分析した。第一段階の1620年から1677年までの明末清初の時期は清朝統治下の「強制移民時期」で，大多数は戦乱中の「強制的拉致」によって来た朝鮮人だった。第二段階の1677年から1881年，清朝は東北地区に対して「封禁政策」を実施し，鴨緑江，豆満江の北岸の居住と耕作を厳禁したが，朝鮮北部の自然災害などにより，清朝の「封禁政策」や朝鮮の「鎖国政策」にも関わらず，大勢の朝鮮人が江北に移住することで，たくさんの移民村落が形成された。1881年，清朝は「封禁政策」を廃止し，「移民実辺」政策を実施することで，大勢の朝鮮人を受け入れた。第三段階の1882年から1910年までは，清朝が延辺地区を朝鮮人の「専門開墾地区」として確定（1885年）し，延辺朝鮮人集居区の形成を加速した。第四段階の1911年から1920年までは「自由移民時期」であり，1910年に日本が朝鮮を占領してから，反日人士などの大勢の朝鮮人が中国東北に転入した。第五段階の1921年から1931年の「9・18事変」までの「移民制限時期」では，中国政府の「帰化入籍」政策などによって朝鮮人の人口増加の減少が見られた。第六段階の1931年から1945年までは三つの時期に分けて取り上げられている。1931年から1936年の「移民制限時期」には「9・18事変」後，日本は移住朝鮮人に対して「統治―安定政策」を実施すると同時に，「集団移民」の準備を加速した。また，新しく移住する移住民には朝鮮総督府から発行された「移住民証」を持たせて「集団部落」に集中させた。1937年から1941年の「集団移民時期」には，日本の朝鮮人移民政策により，大規模の朝鮮人が延辺・東辺道[v]・吉長及び北満地区の39県に移住した。1941年から1945年の「開拓移民時期」に日本は，「開拓団移民」として朝鮮人移住民を強制的に北満・西満地区に移転した。1945年日本の敗戦前，中国の朝鮮人人口は170万人を上回ったという。新中国設立[vi]前に朝鮮半島に帰還した人は約70万だった。

「集団移民時期」に満州へ移住した朝鮮人移民は「集団移民」，「集合移民」，「分散移民」の三つの種類があった。朴仁哲（2015）はこの時期の朝鮮人移民は，南部朝鮮地域出身で稲作を営むものが多いことを指摘し，1939年に満州へ移住した朝鮮人農業移民のデータを以下のようにまとめた。

表2　朝鮮人農業開拓民入植状況（1939年）

種別	集団移民	集合移民	分散移民
戸数	3900	915	7231
人口	20085	4853	27056
入植地	安図，汪清，樺甸，懐徳，柳河，寧安，穆稜，盤山，興京	懐徳，興京，通遼，牡丹江，穆稜，新安鎮，寧安，盤山，三岔口等	安東，図們，開山屯

出所：朴仁哲（2015）「朝鮮人「満州」移民のライフヒストリー（生活史）に関する研究」より引用。

表から見ると，「分散移民」の割合が一番高いことがわかる。しかし，「分散移民」の割合がいちばん高かったにも関わらず，今までの研究では「分散移民」についての記述は少なかった[vii]。

松村高夫（1970）によれば，対満朝鮮人移民政策が展開するなかで，満鮮拓植会社が扱った開拓朝鮮人の合計は1941年5月末までで3万7824戸，18万5928名を数えていたが，この数字は分散移民を

含んでいない。また，厳格な統制を逃れて満州へ移動した朝鮮人も多く，実際に移動した朝鮮人数はこの数字の数倍に達すると推定される。

本稿では，中国の国境地帯である図們，開山屯地域を含む，豆満江の川筋の村での人びとの交流を研究課題とし，主に1930年代～1950年代の朝鮮人の往来に注目する。

30・40年代に避難を目的とした大勢の朝鮮の人たちが中国に渡って行った。その中には3，4歳の子どもを背負って川（豆満江）を渡って移住した人も少なくなかった。例えば，以下の人びとが，自身あるいは自身の兄弟が小さい子どもの頃，背中に背負われて豆満江を渡ったことについて語っている。

先祖たちは朝鮮に住んでいた。父は北朝鮮に住んでいたが，姉が3歳の時（1935年）に姉を背負って朝鮮から中国に渡って来た。父の三兄弟が中国に渡って来た。伯母2人は中国に移住して，他の伯母2人は朝鮮に残った。そうして，豆満江を渡って来て，A 地域に行き着いて暮らしていた。

インフォーマント A（70代，女）

41年，40年代のはじめの頃に中国に渡ってきた。お父さんとお母さんと一緒に。あまり覚えていないけど，お父さんにおんぶされて来た。下の子たちは皆，ここ，中国で生まれた。

インフォーマント B（80代，男）

祖父は咸鏡北道の出身で，私たちはもともと漁師だったと聞いた。漁猟に出ることで生活していたと。祖父は7人兄弟で，そのうち4人（男3人，女1人）が中国に渡って来た。その時に父は6歳（1941年）だった。他の3人の兄弟はそのまま北朝鮮に残った。

インフォーマント C（50代，男）

お父さんも咸鏡北道[viii]で過ごしていて，私もそこの生まれだった。3歳（1942年）の時に中国に渡って来て生活した。ちょうど，中国で土地を耕し，朝鮮の人たちが移民として渡って行くときだったと思う。40年代には避難するために朝鮮の人たちがたくさん中国に渡って来た[ix]。

インフォーマント D（70代，女）

日帝時代には日本人が，男，若い青年たちを強制的に連れていって労働をさせて，その鉱山に入ると，死ぬまでは出られなかった。それで父は日本人に捕まらないように（巨済島[x]から）中国に逃げて来た。当時，姉は3歳（1943年）で背負われてきて，私たち，下の子は皆中国で生まれた。

インフォーマント E（70代，女）

このように，40年代の中朝国境では，人々は自由に往来することができた。川（豆満江）の近くに住んでいた人たちは，船に乗って自由に往来できたという。川の近くに住んでいる北朝鮮側の人た

ちにとって，川の向こう側の村（中国）は市場として行き来できるような場所でもあった。両側の人たちは自由に川を渡って，飲みに行って来たり，船に乗って商売に行ったりもした。

50年代に入って，朝鮮の人々は，今度は中国から北朝鮮に流れていくことになった。50年代の主な移動としては，朝鮮戦争前後における中国人兵士としての移動，反右派闘争，大躍進，1959年前後に北朝鮮からの要請を受けた数万規模の移動などである。（権香淑，2011）[xi]

次の二人の証言は，朝鮮戦争前後における中国人兵士としての移動に関して，言及している。

> 私たちはもともと中国に住んでいたが，北朝鮮にいる曽祖父の世話を，体の不自由な祖父の代わりに父がすることになって，父は1947年に北朝鮮にいった。その後，朝鮮戦争が始まって，父は参戦することになったため，妊娠していた母は中国に戻って私を産んだ。停戦して，1954年に母は祖国建設などで苦労すると思い，私を中国において北朝鮮に帰った。
>
> インフォーマントF（60代，女）

> 姉の夫が朝鮮戦争の時に支援軍として参戦してから，停戦後も北朝鮮に住むことにした。それで姉も一緒に北朝鮮に住むことになった。50年代には姉から北朝鮮の海鮮物，服，皮靴，米などをもらった。
>
> インフォーマントG（70代，男）

そのほか「伯母は抗美援朝[xii]で北朝鮮に行ってきてからずっと中国に住んでいる」と語ったインフォーマントもいた。また，国境地帯で経験した朝鮮戦争の当時の状況をインフォーマントは以下のように述べた。

> …その橋が断たれたのは，1952年の秋だった。朝鮮爆撃で。私はその時，家の外で遊んでいて，父の声（家に帰ること）に気づかなかった。そして顔をあげて見ると…。その後に爆撃が終わったら，朝鮮から大勢の人が凍った川を渡って中国に入ってきた。その人たちの中には枕を背負って来る人が多かった。慌てて避難してきて…。私の家にも2人が，枕を背負って入って来た。その後に様子を見たら，慟哭していた。それで母も一緒に泣いた。それがかわいそうで…。
>
> インフォーマントG（70代，男）

以上の語りからも分かるように，戦争の被害を免れるために，否応なしに朝鮮から中国へ渡ってきた人もいたということである。いうまでもないかもしれないが，語り中の枕とは，就寝中の赤ん坊と間違えて持ってきてしまったものである。

5. 往来のエピソード

5.1. 1940～50年代の往来

40・50年代の国境地帯での人びとの往来・交流を以下のインフォーマントの話によってまとめる。

5.1.1.　船による往来

40年代（1945年前まで）の中朝国境では，人々は自由に往来することができた。川（豆満江）の近くに住んでいた人たちは，船に乗って自由に往来できたという。川の近くに住んでいる北朝鮮側の人たちにとって，川の向こう側（中国東北）の村は市場として行き来できるような場所でもあった。両側の人たちは自由に川を渡って，飲みに行って来たり，船に乗って商売に行ったりもした。40年代の国境地帯の状況をインフォーマントは以下のように述べた。

> 私の幼い頃（40年代）には，ジェジョン[xiii]（제정，帝政）時代とみんな言っていたが，その時は船があって，自由に行ったり，来たりしていた。商売も自由にできて，渡って行って酒を飲んだり，遊びに行って来たり，また，ここ（中国）に来て酒を飲んで，遊びに来たり，そうしていた。
>
> 昔，母は船に乗って自由に往来した。渡って行って，市場で買い物したり，私が生まれてから，いや，そのすぐ前（1938年・1939年）にもそうだった。ジェジョン時代には，船口[xiv]も市場のようなところだった。また，そこの人たちも渡って来たり，居酒屋もあった。その農村ではみんなそうだった。そうして，船に乗って商売をしたり，頭の切れる人は密輸もした。
>
> そう，私たちが子どもの頃は，白いゴム靴とか，ノートとかをそこ（北朝鮮）から持って来た。北朝鮮から，塩やさば，スケソウダラなどを持って来て，私たちが幼い頃はそうして生活していた。
>
> インフォーマントA（70代，女）

インフォーマントAによると，40年代前後，1945年の日本帝国敗戦前までは，国境地帯の人びとは船に乗って自由に往来できる時代であり，「日本語で話さなければならない時代[xv]」でもあった。

5.1.2.　川を渡って往来

豆満江を渡って往来した人は水深が深いところでは泳いで行ったり，水深の浅いところでは，川の流れに従って渡って行ったりもした。当時，国境地帯の人たちは親戚に会いに行く人もいたが，北朝鮮に遊びに行ったりする人もいたという。

> 1946年にここ（中国）から豆満江を泳いで渡って行った。その時には，北朝鮮に親戚もいたが，親戚に会うことのほかにも，遊びに行ったりもした。その時は通行証とかもなかった。逮捕する人とかもいなかった。万年筆とかを持って行って，海鮮物を持って帰ったりした。
>
> インフォーマントH（70代，男）

> 50年代には，川を渡って，北朝鮮にいる姉の家に行って，米や海鮮物をもらって来た。あと，服，皮靴などももらって来た。
>
> インフォーマントG（70代，男）

1932年の日本帝国による満洲国建国以来，朝鮮半島から「満州国」への往来は自由に行われた。しかし，事例から見ると，1945年に「満洲国」が消滅した後にも，中朝国境での人びとの往来は依然として行われていたことがわかる。

5.1.3.　冬の凍った川での交流

1950年代，国境地帯の川筋の村の子どもたちは冬になると，凍った川に出て一緒にソリに乗ったりスケートをしたりした。当時の朝鮮族の子どもたちは凍った川で出会った北朝鮮の子どもたちと遊びながら友達になったという。その頃の朝鮮族の子どもたちの間には「北朝鮮のスケート」が流行っていて，北朝鮮の親戚からスケートをプレゼントしてもらったりしたという。

> 50年代には，豆満江が凍ると，中国でも北朝鮮でも子どもたちが出て来て，一緒にソリに乗ったりして遊んだ。その時には国境での制限が厳しくなかった。凍った川で会う子どもたちは皆見知らぬ子たちで，遊びながら友達になったりした。
>
> インフォーマントA（70代，女）

> 50年代には，冬になって川が凍ったら，みんな川に出てソリに乗ったり，スケートをしたりした。北朝鮮の子どもたちと一緒にそうやって遊んだ。
>
> インフォーマントG（70代，男）

> 昔は，北朝鮮の子どもたちと一緒にソリに乗ったりもした。その時は国境線のところ（中国側）で監視されたりすることもほとんどなかった。北朝鮮でも，保衛指導員だけで，その時の私たちは子どもだったけど，軍隊や軍人にはあったことがなかった。北朝鮮の子どもたちと一緒にソリに乗ったりして遊びながら，ものを交換した。
>
> インフォーマントI（60代，男）

5.1.4.　煙草乾燥小屋の映画館と交流

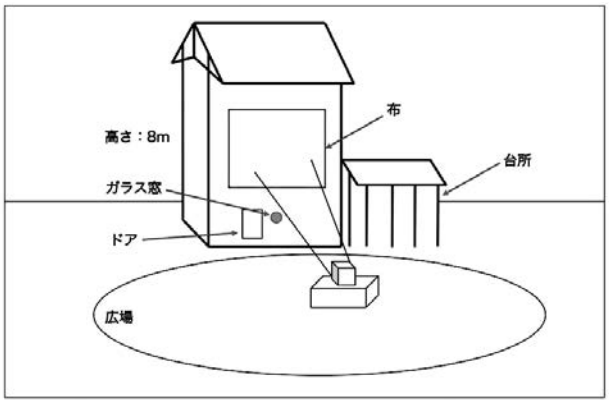

図1　煙草乾燥小屋の映画館

1950年代に中国から北朝鮮に映画[xvi]を見に川を渡って行くことは，その時代の国境地帯の人（特に川筋の村の人）にとっては，決して珍しいことではなかった。当時の北朝鮮では「農村地区放映隊」が村を回りながら映画を放映した。村の煙草乾燥小屋の壁に布を貼って，広場の中心に機械を置いて映画を上映した。その当時は川を渡って映画を見に行っても逮捕されたりす

ることはなかったという。

北朝鮮の子どもたちは映画上映のある日は尾根で上着を振り回して（中国側の子どもたちに）知らせた。当時の北朝鮮では，放課後にはサイレンを鳴らした。その大きい音が鳴ると，中国側の子どもたちはその辺に視線を向ける。北朝鮮の尾根で子どもたちが上着を振り回していたら，その日の夜には映画があった。私たちはすぐにわかって，「あそこで映画をやるから，今夜川を渡ろう」と話し合う。そうして，事前に準備して渡って行って映画を見たり，干したスケソウダラとかをもらってきて食べたりした。その時に，私たちは，懐中電灯のような軽工業品を北朝鮮に持って行って，スケソウダラやマダコと交換したりもした。

インフォーマントＩ（60代，男）

50年代，私たち，子どもたちも映画チケットをもらった。チケットを北朝鮮の姉か，甥っ子（姉の息子たち）が何枚も持って来て私にあげたりした。朝鮮のお金で一枚300ウォンくらいだった。そうしたら，私が「映画見に行こう」と友達を連れて映画を見に北朝鮮に渡って行ったりした。それは珍しいことではなかった。映画を見る時に甥っ子たちは干したスケソウダラを持って来ると，座って一緒に食べたりもした。

インフォーマントＧ（70代，男）

5.1.5.　親戚訪問などによる交流

当時の延辺地区の朝鮮族は延辺自治州から発行された通行証で北朝鮮に行くことも可能だったが，その行動範囲は辺境周辺の町に限られていた。辺境周辺以外の町に行くためにはパスポートが必要だった。通行証の滞在期間は1ヶ月以内でパスポートの滞在期間は3ヶ月，6ヶ月，1年などと様々だった。以下は1950年代の通行証やパスポートによる移動の事例である。

私は1957年に初めて北朝鮮（咸鏡北道）に行った。その時，私は17歳で，父と一緒に親戚訪問で行って来た。父は通行証を持って，私はまだ成人ではなかったため，父の同行者として行って来た。北朝鮮の親戚の結婚式に行って来たが，当時の北朝鮮は戦争が終わったばかりで，町は爆撃などによりひどい状況だった。

インフォーマントＡ（70代，女）

父は中国で高校に通う時に腎臓の病気になって，北朝鮮の病院で手術を受けて来た。1957年にパスポートで北朝鮮に行って，親戚に案内してもらってチョンジン[xvii]の病院で手術した。その時の北朝鮮の医療技術はとても先進的で，その時に受けた治療もとても良かったと聞いた。

インフォーマントＣ（50代，男）

5.2.　50年代半ば以降の移動

50年代半ばごろ，中ソ対立[xviii]，大躍進[xix]などの背景の影響もあり，中国国境地帯の村には「外流の風[xx]（朝流時代）」が吹き始め，今度は人びとが中国から北朝鮮へ流れて行くようになった。以

下の事例からその事実が明確に見える。

1955年，1956年その辺りから大勢の中国の朝鮮族が北朝鮮に渡って行った。その中には法律上の手続きをして行った人もいた。中国でも，北朝鮮に移住したい人たちには手続きをしてあげたりした。うちの村でも3戸が北朝鮮に移住した。その時は北朝鮮に行くと，家もただでもらったり，職を与えてもらったりした。

インフォーマントG（70代，男）

50年代に，朝鮮戦争が終わってから，大勢の中国の朝鮮族が北朝鮮に渡って行った。私もその時に北朝鮮に何回も行ったりした。その時には民間の家でも食べさせてもらったりした。また，北朝鮮には接待所があって，渡って行った人たちを集団で食べさせたり，泊まらせたりして，職を与えたりもした。

インフォーマントJ（70代，男）

1959年当時，北朝鮮は裕福だった。叔父はその時に息子2人をテーブルに乗せて川を渡って北朝鮮に移住した。叔父は知識のある人で，中国で農民としての生活をやめて，北朝鮮で職業を変えて生活するために行った。その時に私たちは豆満江からとても近いところに住んでいたからすぐ渡って行くことができた。

インフォーマントK（70代，女）

また，50年代後半，1959年には，北朝鮮の復旧建設[xxi]を支援する人たち（朝鮮族）は通行証をとる必要もなく，移住のために自由に北朝鮮へ渡って行くことができたという。

1959年には復旧建設を支援する人たちはみんな北朝鮮に行った。移住者として応募して渡って行った。だから私の又従姉妹も1959年に北朝鮮に移住した。小学校の同級生もその時に北朝鮮に移住した。

インフォーマントA（70代，女）

6. 考察

今回の，延辺朝鮮族自治州における夏季15日間に及ぶ野外調査（フィールドワーク）ならびに聞き取り調査をつうじて，1930年代から50年代において人びと（主に朝鮮族）が中朝国境を頻繁に跨いで行き来していた状況が明らかとなった。移動の理由や方法には，人あるいは時期によって違いが見られた。

朝鮮統治（日帝，帝政）時代においては，朝鮮半島側から中国側への北に向かって移動する流れが見られる。あるインフォーマントの移動の理由には，中国での商売や飲酒，遊びが挙げられ，また，子どもたちの豆満江でのスケート遊びに象徴されるように，中朝国境地帯における往来は，かなりの自由度の高さがうかがわれた。また，この間の移動方法としては，舟を利用する方法，凍結した川を利用する方法が挙げられた。

1950年代半ば頃になると，移動の向きが逆転し，中国から朝鮮半島へ南下する動きが見られるよ

うになる。この現象には，中ソ対立や大躍進政策といった政治の影響がある。それらによって，彼ら彼女らが集住する地域や中国の方が北朝鮮と比較し相対的に貧しくなったのである。つまり，より裕福な北朝鮮での豊かな生活を目指して移動する人びとが増加した。また，移動後の北朝鮮においても，家の無償譲渡や職の紹介，歓待があったりと優遇されていた状況が判明した。

現在，国境線というものは元来から存在していたかのように思われているが，中国と北朝鮮の国境地帯での調査を通して見ると，実際1930年代～1950年代には，国にとっても，住んでいた人たちにとっても，国境地帯の国境線というのはとても曖昧な概念であったことが分かった。

本稿の意義を総括すれば，先述した権の問題意識である「身体的な移動」の事例を集めた比較・実証研究の不足を，未だ十分ではないものの，補うことができたと考える。

現代国家になって行くことで，国境というものが次第に，はっきりと存在感を帯びたものとなって行く。これに該当する1960年代の時期以降を今後取り上げ，国境線が濃くなっていく時代であることを明らかにしたい。

【参考文献】

伊豆見元，平岩俊司「中国人民志願軍の撤退と金日成の権力基盤確立」『国際政治』106.pp.149-162.

権香淑（2011）「朝鮮族の移動と東北アジアの地域的ダイナミズム　エスニック・アイデンティティの逆説」『北東アジア研究』20．pp.31-50.

デイヴィッド・アイマー（2018）『辺境中国』白水社．pp.285.

松村高夫（1970）「日本帝国主義下における「満州」への朝鮮人移動について」三田学会雑誌 Vol.63, No.6（1970. 6）. pp.479（61）-505（87）.

朴仁哲（2015）「朝鮮人「満州」移民のライフヒストリー（生活史）に関する研究：移民体験者たちへのインタビューを手掛かりに」北海道大学大学院教育学研究科.

山室信一（1993）『キメラ 満洲国の肖像』中公新書.

崔庆植．全球化背景下的思考：中国民族政策及朝鮮族历史，现状与未来．中央民族大学．2004年.

【註】

i　IT革命に伴い「出入国管理基本計画（第二次）」（2000年）において打ち出された方針，すなわち「国際ビジネスに従事する者の国際移動の円滑化など専門的，技術的分野の外国人労働者の受け入れに関しては，その推進に関して内外の気運の高まりが認められる分野を中心として，国内における受入れのための条件及び環境を確保しつつ，受入れの拡大について積極的に検討していく」とする短期滞在専門職に滞在期間を拡大する方針をさす。

ii　1905年，鉄道王ハリマンによる。

iii　1909年，国務長官ノックスによる。

iv　以後，満蒙独立国家案への変更がある。

v　中国東北地方の旧行政地区。

vi　1949年10月1日の中華人民共和国建設。

vii　朴仁哲（2015）「朝鮮人「満州」移民のライフヒストリー（生活史）に関する研究：移民体験者たちへのインタビューを手掛かりに」北海道大学大学院教育学研究科 pp.20

viii　함경북도（咸鏡北道ハムギョンブクト）：朝鮮民主主義人民共和国北東部に位置。

ix　「日本の朝鮮統治における土地調査事業や産米増殖計画によって土地を失い，食糧を奪われて流浪，移住した人々」：朝鮮人の満洲への流入，移動が本格化したのは，日本帝国主義による強制併合以後であり，間島および東辺道地方を中心に 1930 年にはその数 80 万ともいわれていた。そのほとんどが日本の朝鮮統治における土地調査事業や産米増殖計画によって土地を失い，食糧を奪われて流浪，移住した人々であったが，また日本の支配に反対し独立を求めて闘う抗日運動家も少なくなかった（山室信一，2004，『キメラー満州国の肖像』，中公新書 .）。

x　거제도（巨済島コジェド）

xi　大躍進58 ～ 61年，反右派闘争57年

xii　抗美援朝（抗美援朝運動，抗美援朝戦争，1950年10月～ 1953年7月）：朝鮮戦争の一部分として，中国人民支援軍が参戦した段階を指す。

xiii　日帝時代

xiv　船口村：中国延辺朝鮮族自治州，龍井市开山屯镇

xv　1937年，満洲国は学制を公布したが，そこで定められた言語教育の基本方針は，「日本語は日満一徳一心の精神に基き国語の一つとして重視す」というものであった。こうして日本語が満洲語（満洲国では中国語，中国人という用法は禁句であり，中国語は満洲語とよばれた），モンゴル語と並んで満洲国の国語，しかも満洲国のすべての地域で修得を課される第一国語と定められ，「日本語の修得は如何なる学校に於ても必須とされ，将来の満洲国における共通語は日本語たるべく約束されている」（満洲日日新聞社『昭和15年版・満洲年鑑』）といわれるにいたった。満洲国総人口に占める日本人の割合は最大でも3％に満たなかったにもかかわらず，である。

xvi　当時上映した映画：「피바다」，「소리없는 총소리」，「꽃파는 처녀」，「꽃피는 마을」，「カチューシャ」など

xvii　청진（清津）：朝鮮民主主義人民共和国，清津市。

xviii　1950年代の理論対立に始まり，1960年代に公然としたソヴィエト連邦と中華人民共和国の社会主義革命路線を巡る対立。両国の対立にとどまらず，社会主義陣営が二分されることとなり，東西冷戦を変質させることとなった。1980年代にはソ連のペレストロイカ，中国の改革開放路線への転換によって対立は沈静化し，1989年のゴルバチョフ訪中によって終わった。

xix　毛沢東が圧倒的に農業の盛んな国をわずか数年で近代的な経済工業国にしようとした政策。だが大失敗に終わり，人びとは近所の工場で働くために農地から駆り出され，収穫高は落ち込み，ひどい旱魃が二年続いて食糧生産量はさらに減少した。

　役人たちは怖くて真実を報告できず，数字を改竄した。毛沢東は独善的な政策でロシアとアフリカへ穀物を輸出し続け，中国共産主義体制の優位性を世界に納得させようとしたが，食糧不足が深刻化しただけだった。中国を工業国に変えるどころか，大躍進政策は世界最悪に数えられる飢餓を招き，4500万人の死者を出した。

xx　「外流の風（외류바람）」・「外流時代（외류시대）」・「朝鮮の風（조선바람）」：朝流時代北朝鮮ブーム，この時代を象徴する言葉として，インフォーマントたちが異口同音に述べていた。

xxi　朝鮮戦争休戦後に立てられた，経済復興を目指した方針。次のような内容を持つ。⑴自国の技術と資源に依拠する。⑵投資の優先順位を重工業に置く。⑶多方面的な発展を目指す。⑷現代技術によって装備する。⑸対外経済関係において，自国で生産できな いかあるいは不足するものを輸入し，自国で有り余っているものを輸出するという「有無相通」の原則で貿易を行う。

Anthropological Study on the Movement and Life Practice of People in the Border Area of China - North Korea:

From the 1930s to the 1950s

Huan PIAO
（Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University）
Lee INJA
（Associate Professor, Graduate School of Education, Tohoku University）
Keita NAOI
（Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University）

The purpose of this manuscript is to clarify the movement of people on t he border between China – North Korea border and the consequent movement of goods. From the time when Japan annexed Korea by force in 1910 to the present day, the number, motive and purpose of people who tried to move across the China – North Korea border differed with the times. It has also undergone a great change over time.

In other words, the presence of the border means "the wall of blocking movement of people and its meaning has changed with the times. There was a time when the border felt like a wall for people to block people coming and going there. But there was also a time when the border could pass naturally as if it had melted away in the ground.

Keyword：China – North Korea border, border area, Korean-Chinese, movement of people